

「環境・共生・協働のコミュニティ－教会の将来－」研究会  
**正義と包摂的であることをめざす教会共同体**  
 －21世紀に向けたエキュメニカル宣教論の視点からの一考察

小田部 進一

### 1. はじめに — 研究会の主題

2022年11月14日に、富坂キリスト教センターで「環境・共生・協働のコミュニティ－教会の将来－」という新しい研究会の第1回研究会が開催された。この研究会は、「コミュニティ」を主題としている。そこには、現代の私たちが様々な次元で「共に生きる」ことの危機に直面しているという問題認識がある。環境破壊、グローバルな経済活動による貧富の格差の拡大や人口移動の増加、人口爆発がある一方で超高齢化する社会があり、行き過ぎた競争原理や自己責任論による社会の分断と人々の孤立の問題など、グローバルな次元とローカルな次元が密接に絡み合いながらもますます深刻化する諸問題が、人間らしい生活の基盤であるべき地域のコミュニティの存続に深刻な影響を与えている。本研究会は、このような21世紀の最初の四半世紀の世界的状況を見据えつつ、人間が共に生きることを支える「コミュニティ」を主題とし、すべての人が人間らしく、そして共に生きることを支える「コミュニティ」とはどのようなものであるか、環境、地域、協働の視点から考察し、キリスト教の教会の将来的ヴィジョンを探る学際的な共同研究である。

そのためには、くり返し、教会という共同体の本質が神学的に問われ、また捉え直される必要がある。ただし、本研究会が、教会の内と外という単純な二項対立的な枠組みを越え、包括的に「コミュニティ」そのものを主題とし、教会がその中に存在する自然環境や地域社会の今日的な課題に焦点を当てること、またそのような考察を通して教会共同体のあり方とその存在意義を捉え直し、さらには将来の存続のあり方を展望することもまた、極めて神学的な思考に基づくものである。それは、特に20世紀以降の宣教論のパラダイム転換を通して提案されてきた神学的な思考の新しい枠組みの中で明らかになるであろう。本稿は、この枠組みの中で、どのように教会という共同体が主題とされているかについて、21世紀のエキュメニカルな重要文書を手がかりに示すことを目指している。しかし、その前に、「コミュニティ」という用語の語源とその多義性、および教会という用語

の多義性について確認しておきたい。

## II. 「コミュニティ」と「教会」という用語について

コミュニティは英語の「community」をカタカナ表記にしたものであり、元来、「共同、共有」を意味するラテン語の「コンムニタース (communitas)」、さらに言えば、「共同の、共通の、共有の」を意味する形容詞「コンムニス (communis)」に基づく。この「コンムニス」は、そもそも、同様の意味を持つ「co-」という接頭語が「義務、負担、重荷、好意、贈り物」といった多くの意味を持つ「ムヌス (munus)」という名詞に結びついた単語である。したがって、「コンムニス」とは、「ムヌス」を相互に与え合い、共有する人と人とのつながりや関係をその意味の核としていると言えるであろう<sup>1</sup>。元来、そのような性質を含み持つがゆえに「共同体」と呼びうる人間同士の結びつきとそのあり方がコミュニティという語の響きの中にある。

また、「コンムニオー (communio)」は、「共有」を意味すると同時に、キリスト教の伝統的な信仰告白である使徒信条第3項では「聖徒の交わり (communio sanctorum)」の「交わり」と訳されている言葉にも用いられている。その際、カトリックの伝統では、特に聖餐とその交わりを意味するものとして用いられ、宗教改革者ルターは、そこに信仰者の共同体と相互に重荷を負い合う交わりを見出し、それぞれに教会という共同体の核となる要素をそこに読み取ってきた。もう少し遡って、教会の共同性あるいは交わりという要素について注目するならば、すでに新約聖書の中で、使徒パウロが、神の恵みに与る「交わり」とそのような者たちからなる共同体の構成員同士の「交わり」を「コイノニア (κοινωνία)」というギリシア語で言い表している(1コリ1:9)<sup>2</sup>。ドイツの神学者ドロテーゼレ(1929-2003)は、キリスト教の教会の三つの主要な課題は「宣教(ケリュグマ)」、「奉仕(ディアコニア)」、そして「交わり(コイノニア)」であると指摘している<sup>3</sup>。つまり、教会は、神と人との交わりを核とした共同体として理解されてきたのである<sup>4</sup>。

今日、コミュニティという英語を辞書で引くと、キリスト教の修道共同体といった宗教的共同体を意味する場合にも、地域社会や地域住民というより包括的な社会全体を指す場合にも、同じコミュニティが用いられていることが分かる<sup>5</sup>。また、その他の利害関係で結びついた特定のグループを指す場合にも、この語が用いられることがある。ちなみに、ドイツ語では、「コムニテート (Kommunität)」は、

宗教的な性格を持つ修道共同体に用いられ、地方自治体は「コムーネ (Kommune)」、あるいはよりドイツ語的な「ゲマインデ (Gemeinde)」という語が用いられる<sup>6</sup>。しかし、ドイツで「ゲマインデ」という語は、地域社会や地域住民全体を意味するだけでなく、キリスト教の教区と教区民全体を表現するためにも用いられる。このような事態は、世俗化される以前のヨーロッパで、教会への所属と地域社会への所属、教区民であることと地域住民であることが一致していたことに遡る。そのことについてこれ以上深入りはしないが、ここではドイツ語の「ゲマイン (gemein)」が他の意味と並んで「共同の、共通の、公共の」という意味を持つ形容詞であることを指摘しておく。そこに、「共に、一緒に」を意味する「ゲマインザム (gemeinsam)」、そして、「共同体、交わり」を意味する「ゲマインシャフト (Gemeinschaft)」が由来するからである。そして、ドイツ語の「コミュニティ」も「ゲマインデ」も、そして「ゲマインシャフト」も、英語ではコミュニティと訳されることができるとも指摘しておく。このように、コミュニティという語は、共通の認識や体験であれ、ある物や行為に関わる相互共有や相互援助であれ、相互に与え合い共に生きる人と人とのつながりや関係性をその核としながら、一定の地域で具体的にそのような性質を持つ多様な共同体を称するのに用いられてきた歴史を持ち、実際、多義的な意味を持っている。

また、本研究会は、他宗教にも開かれた宗教多元的な研究会であるため、キリスト教の「教会」という用語についても基本的な事柄を確認しておく。なぜなら、教会という用語もまた、多様な意味で用いられているからである。教会は、永遠なる三位一体の神との交わりにおいて時間と空間を超える霊的・不可視的な教会を意味することも、この世に可視的に存在する制度的な教会を意味することもある。また、このように区別はされるが、教会は基本的に霊的教会でも世にある教会でもあり、これら二つの側面を同時に含み持つと考えられている。さらに、可視的な教会に関連して、教会は、地域にある「各個教会」を指す場合もあれば、各個教会が所属する「教区」や「教団」を意味する場合もあれば、あらゆるキリスト教の教派・教団を総称する文脈で用いられることもある。

本稿では、キリスト教の教会一般を指す場合には「教会」を、そして、各地域の個別の教会を呼ぶ場合には「各個教会」を用いる。また、教会に基盤を持ち、教会的に組織された理念の共有や相互援助による共生の関係について強調するときには「教会共同体」や「教会という共同体」といった表現を用い、「コミュニティ」というカタカナ表記を用いる場合には、地域に基盤を持ち、家族、諸々の宗教組

織や地域組織等を包括する地域全体の共生をもたらす社会システムの一局面を指す用語として用いる<sup>7</sup>。冒頭で指摘したように、包括的な地域のコミュニティが抱える問題が、より大きな社会的、そしてグローバルな経済的背景をもつ場合があるため、地域性に根差したコミュニティが共同性や統合性の機能をうまく発揮できていないという問題がある。そのような状況の中で、教会が、どのような役割を担っていくことができるのか、また担うべきであるのかが問われている。

教会は、三位一体の神との霊的な関係その源泉とするが、約2000年の歴史の中で、そして各地域において、人と人とが共に生きる具体的なこの世の共同体としてコミュニティ形成に関わって来た。イエスの運動において、イエスと出会い、弟子たちやイエスに従う人々の共同体が形成され、その後のキリスト教の歴史は、教会という共同体の歴史でもあるし、また、教会と地域のコミュニティとの関係の歴史でもある。したがって、教会の歴史の中に、コミュニティをめぐる様々な課題、理論、具体的な実践を見出すことは可能である。しかし、それは必ずしも積極的な意味に限られたものではなく、他の宗教共同体の否定（例えば反ユダヤ主義）や地域のコミュニティの破壊（例えば、植民地主義に加担した宣教）といった消極的な内容を含む歴史でもあることに教会は自覚的でなければならないと考える。このような過去の反省から、教会が和解に基づく現在と未来に開かれた共同体であることが求められている。それは西洋的な文脈においてだけでなく、日本とアジア諸地域との関係においてもその歴史に独自の仕方では求められていると考える。「過去に目を閉ざす者は結局のところ現在にも盲目となります」と言われている通りである<sup>8</sup>。

### III. 20世紀キリスト教における「宣教論」のパラダイム転換

したがって、本研究会は、教会というキリスト教独自の共同体理解を踏まえつつも、教会が具体的に存在する地域のコミュニティに目を向け、またそこに聞き、そこにある課題を共に考えることを大切にしようとしている。教会に集う一人ひとりを、様々な社会的つながりの中で生きる人間として包括的に捉えるならば、教会が地域のコミュニティとのつながりやその課題に目を向けることが教会の共同性と交わりの実現にとって重要であることは、当然のことのように思われるかもしれない。しかし、「教会から地域へ」の方向性だけでなく、「地域から教会へ」の方向性もまた神学的に重要であるということは、最近になってようやく広く共有されはじめたところであるように思われる。そのことを示す21世紀のエキュメ

ニカルな重要文書が、2013年に韓国の釜山で開催された世界教会協議会（World Council of Churches：以下、WCCと略記）の第10回総会に正式に報告された文書の一つ『いのちに向かって共に ― 変化する世界情勢における宣教と伝道のあり方』（以下、『いのちに向かって共に』と略記）である<sup>9</sup>。繰り返しになるが、本研究会は、キリスト教の信仰や知識を前提としない研究員にも開かれた学際的・宗教多元的な学びの共同体であるため、まず本文書の背景を成すエキュメニカル運動と20世紀後半における宣教論のパラダイム転換について概観するところからはじめる。

### 1. エキュメニカル運動

WCCは、1948年にアムステルダムで第1回が開催され、現在120か国を越える地域の352のプロテスタントを中心とする諸教会（約5億8000万人）が加盟する教派を越えたエキュメニカルな協議会である<sup>10</sup>。多くの東方正教会の諸教会も加盟しており、カトリック教会は正式には加盟していないが、数十年オプザーバー（陪席者）として参加している。エキュメニカル運動のエキュメニカルという言葉は、もともとはギリシア語の「家」を意味する「オイコス（οἶκος）」から派生した「共に住む世界」や「全世界」を意味する「オイクメネー」に由来する。20世紀以降のキリスト教の世界では、歴史的・地理的・文化的、そしてその教義においても多様な世界の諸教会が一つのキリスト教として一致していくことを目指す運動をエキュメニカル運動と呼んでいる。WCCのロゴマークは、一つの船に乗った十字架で表現されている<sup>11</sup>。

### 2. 「神の宣教（ミッシオ・デイ）」への方向転換

2000年のキリスト教の歴史には争いが絶えなかった。しかし、20世紀のキリスト教は、その前半に、1910年のエディンバラで開催された「世界宣教会議」を一つの出発点として、エキュメニカル運動へと向って歩み始めた。その後、1921年に、「国際宣教協議会」（International Missionary Council：以下、IMCと略記）が設立され、定期的にその時代の中で教会の課題について協議する会議が開催されてきた。この流れの中で、20世紀後半に、「宣教（ミッション）」概念をめぐる大きな方針転換が起こる。新しい方針は、1952年にドイツのヴァリニンゲンでIMCの主導で開催された世界宣教会議で提示された「神の宣教（ミッシオ・デイ：missio Dei）」という表現で知られている<sup>12</sup>。

この新しい宣教論は、従来、救いの無い非キリスト教的世界に教会が広まり、キリスト教化されることによってその世界が救われると考え、行われてきた植民地主義的とも指摘される宣教のあり方の克服、またそれからの決別として提示された。宣教論的パラダイム転換は、しばしば、「神→教会→世界」という枠組みから「神→世界→教会」という枠組みへの転換として図式的に示されている<sup>13</sup>。つまり、世界に対する宣教の主体は教会ではなく「神自身である」ということへの転換である。その際、キリスト教の神学的特徴である三位一体論が基軸となっている。神がこの世を愛する目的で御子イエス・キリストと聖霊をこの世へと派遣している。神自身が世の救いを使命とした宣教の神であり、世界の諸々の複数形の教会は「神から世界」に対する愛の運動という単数形の宣教に参加するのだ、という宣理解解への転換である。この「神の宣教」という理解は、東方正教会、多くの福音派、そしてカトリックの宣教神学にも受け入れられてきた<sup>14</sup>。この宣教論の転換について、西原廉太は、「神は、教会が届いていない地においてもすでに働かれているとし、教会は世界からアジェンダを得るという理解をもたらした」と指摘している<sup>15</sup>。

南アフリカの神学者デイヴィッド・ボッシュ（1929-1992）は、1970年代以降に、「神の宣教」の視野が「全世界的」な方向へと修正的に拡大されたことを説明し、トーマス・クラムの著作を参照しつつ、次のように述べている。「神は全世界のことを、み心にかけて下さるのであるから、ミッシオ・デイの視野もまた全世界的でなければならない。あらゆる人々の、あらゆる面と関連を持つ。世界の創造、その保全、贖い、そして最終的な完成について神が世界の方を向いてくださること、それがミッション、宣教である」<sup>16</sup>。「神の宣教」論は、キリスト教における人間中心の見方から神中心の見方への悔い改めであり、その転換が根源的であるがゆえに、新しい視界が開け、全世界的で環境と人類を含む地球の課題が教会の課題として見えるようになった。ボッシュによれば、「神の宣教」の理解は次のようにまとめられる「宣教は神の御心にその起源をもつ。神は遣わす愛を湛える泉である。ここに最も深い源がある。これ以上に深く浸透することはできない。神が人を愛するがゆえに、宣教がある」<sup>17</sup>。そして、ボッシュによる「ミッシオ・デイとしての宣教」という項目は、「以前の狭い、教会中心の宣教観に再び戻ることは、もはや考えることさえできない」という言葉で結ばれている<sup>18</sup>。以上に見た宣理解解のパラダイム転換の背景に、植民地主義的宣教への反省という西洋的な関心と課題という歴史的・地域的特質が見られる。しかし、その神学的方向転換が、人間

中心から神中心への垂直な関係における根本的な転換であることにより、「神の宣教」の神学は、西洋の教会の中だけでなく、世界教會的に共有される視点と課題を提示し、新しい協働関係へと世界の諸教會を開くことになったのである。

この神学的な方向転換を各個教會の共同体の視点から見ると、神が地域社会に働いており、教會は神から地域に向けられた愛の運動に参加していく共同体であり、またそのような共同体として機能することが求められているということになる。しかし、それは現にある姿での「地域社会のため」ということではなく、神の愛の働きが地域に実現していくような仕方でもコミュニティ形成に参加していくということである。したがって、「神の宣教」から見えてくる被造物世界の共生のヴィジョンに照らされて、地域の中に、そして教會共同体の中に、すべての人が人間らしく共に生きることを支えるコミュニティがどのように形成されるのか、それはどのようなものであるのか、そして、そこにどのような協働が必要とされているのかが問われることになる。日本のキリスト教もまた「神の宣教」の神学以前に戻ることはできないと考えるが、西洋とは異なる歴史的・地域的特質をもつため、どのような仕方でもこの神学的転換を具体的に実現していくのか、独自の挑戦に立たされていると言えよう。

#### IV. 『いのちに向かって共に』

IMC は、1958年にWCCへの合流を決定し、1961年のWCC第3回総会で正式にWCCに統合され、世界宣教伝道委員会（Commission on World Mission and Evangelism：以下、CWMEと略記）となった。『いのちに向かって共に』は、2013年のWCC第10回総会で最終報告された文書であり、これまでCWMEの中で議論され、深められてきた宣教論が総合されたものと理解されている。西原は、『いのちに向かって共に』という文書について、『神の宣教』（missio Dei）の神学的理念を再度、世界エキュメニカル宣教論の核心へと再設定しようとしているところに大きな特徴がある<sup>19</sup>と述べている。そして、この文書には、20世紀に提唱された「神の宣教」の神学に基づいて、世界の多くのキリスト教の教會が一致して提唱する21世のヴィジョンが描かれている。そのヴィジョンの中で、共同体としての教會が、神に与えられたいちを守るため、環境との共生に、また、地域のコミュニティと協働することに積極的に取り組んでいくことも神の宣教への参加であることが示されている。これらは本研究会の関心と主題とに共鳴していることである。そこで、本稿において21世紀に向けたエキュメニカルなヴィジ

ンの概要を捉えることを通して、本研究会の主題及びその学際的なアプローチが、世界教會的に共有されている、現代的で教會的な課題と取り組むことにつながっていることを確認したいと考える。『いのちに向かって共に』の構成は以下の通りである。

序論 — いのちに向かって共に (1-11 項)

- 1 宣教の靈 — いのちの息吹 (12-35 項)
- 2 解放の靈 — 周縁からの宣教 (36-54 項)
- 3 共同体の靈 — 躍動する教会 (55-79 項)
- 4 ペンテコステの靈 — 天地万物のための福音 (80-100 項)

結論 — いのちの祝宴 (101-112 項)

目次からも顕著なことは、この文書が、靈、すなわち聖靈の働きを基調として宣教をとらえていることである。そこには、東方正教會神学の影響があることが指摘されている<sup>20</sup>。さらに、この構成から明確になることは、本文書が「いのちに向かって共に」という序論に導かれ、「いのちの祝宴」に共に招かれていくという結論で終わっているということである。そして、靈の働きとは、すべての被造物に「いのちに向かって共に」生きることを呼び覚まし、それを実現することへと励ます力であり、それが可能であると確信させる神の生ける働きとして理解されている。以下、特に本研究会の主題と観点に関わる内容を中心に、本文書が 21 世紀の教會という共同体にどのようなヴィジョンを示しているのかを概観する。

## 1. 「神の宣教」

序論の冒頭で、「神は世界全体 [オイクメネー] を神にかたどって創り、いのちを祝福し守るために、絶え間なくこの世界で働いておられる」(1 項)、と言われるとき、上に見た「神の宣教」理解が確認されている<sup>21</sup>。その際、同時に、「今日、私たちを神ご自身の宣教に参与せしめる、いのちを与える神の働きを、どのように、そしてどこで見いだすことができるだろうか」(1 項)、という問いに焦点が当てられている<sup>22</sup>。第 2 項でも全人類に向けられた神の愛による宣教について語られている。「宣教は、三位一体なる神ご自身に源をもつ。聖三位格を一つに結び合わせている愛が、全人類と被造物に注がれるのである。そして御子を世に遣わされた宣教する神は、すべての神の民を招き (ヨハ 20・21)、希望の共同体にな



るよう彼らを力づける」(2項)<sup>23</sup>。そして、この「希望の共同体 (a community of hope/eine Gemeinschaft der Hoffnung)」<sup>24</sup>となっていく教会は、「聖霊の力においてのちを祝い、いのちを脅かすあらゆる勢力に抵抗してこれを変革するよう委ねられている」(2項)と述べられている<sup>25</sup>。では、どのように、そしてどこでその働きを見出し、参与していくのか。この「神の宣教」の視座に関わることとして、序論の第6項は、「周縁への宣教」から「周縁からの宣教」への転換について述べている<sup>26</sup>。そして、この主題は、第2章「解放の霊 — 周縁からの宣教」のタイトルにも見られる。西原は、この「周縁から」という方向性を基盤としているところに、本文書の宣教論の特徴があると指摘している<sup>27</sup>。

そこで、まず、「周縁から」という視座とそこで求められている正義と癒しの全体性の回復への参与について、1章と2章全体から読み取っていくことを試みる。その際、そこに教会が希望の共同体となるためのいくつかの主要な枠組みが提供されていることに注目する。

## 2. 「周縁から」という視座

### 2.1 周縁からの宣教

2章の冒頭にある第36項は、聖霊に満たされたイエスが、「宣教の遂行にあたり、当時の社会で周縁に置かれていた人々と共に歩むことを選びとった」ということの確認からはじまっている<sup>28</sup>。そして、「周縁」という言葉は、「中心」という言葉との対比の中で説明されている。『周縁からの宣教』という理念のもとで、『中心にいる』とは、その人の権利、自由、人格が認められ尊重される制度の恩恵に与れることを意味する。一方、『周縁にいる』とは、正義と尊厳から排除されていることである<sup>29</sup>。ここには、いわゆる西洋のキリスト教の歴史的反省がある。キリスト教が、自らを西洋文化と同一視して「中心からの宣教」、いわゆる植民地的な宣教を行い、「周縁化された犠牲者たちの人格を否定する」ことを結果してきたという反省である<sup>30</sup>。それは「教会の失敗」への反省である。「周縁の人々が共通して直面している主な課題は、すべての人の尊厳と価値を確かなものとする事ができていない社会の、文化の、文明の、国家の、そして教会の失敗によるものである」<sup>31</sup>。こう述べた後、正義の問題へと関心が向けられる。「周縁化や抑圧を生み出す不公平の根本には、不正義がある。正義を求める神の意志は、神の本質と主権に深くかかわっている」<sup>32</sup>。

以上から、「周縁から」という視座は、西洋のキリスト教の歴史的反省を背景と

しながらも、その事柄の核の部分において、「すべての人の尊厳と価値を確かなものとする」(42項)という課題を明確にする概念として用いられていることが分かる。この課題から、「神の宣教」への参与として連帯すべき場所、また、抵抗すべき問題が明確になる。「周縁からの宣教」をタイトルにかかげた2章は、最後の第54項で、「キリスト教共同体[Christian community/christliche Gemeinschaft]は、この世の現実のただ中における神の御国の表れとして希望のしるし」となり、それは正義と癒しの全体性の回復への参与を通して体现されていくと述べている<sup>33</sup>。そこで、『いのちに向かって共に』の中で、正義と癒しの全体性の回復について何がどのように語られているか考察する。正義については1章で癒しについては2章の後半で扱われている。まず、正義の回復について述べられている内容を確認する。

## 2.2 正義の回復

### 2.2.1 環境に関する正義

第1章「宣教の霊 — いのちの息吹」(12項から35項)では、「環境に関する正義」(19-23項)をめぐる問題の指摘と提言がなされている。被造世界全体を包括する宣教は、第20項で「環境に関する正義や持続可能なライフスタイルを求める運動、そして地球環境を尊ぶ精神性を育む活動を通して、すでに諸教会において進められきた」とされながらも、加えて全被造物との和解と一致が強調されている<sup>34</sup>。特に、『いのちに向かって共に』では、「新しい悔い改め」として被造物から人間へという新しい方向性に目を向けている。「被造世界も、多くの点で人類に対する宣教を担っている。たとえば、自然世界は人間の心身をいやす力を持っているのである(…)」(22項)<sup>35</sup>。神の宣教理解の徹底において、環境における正義は、人間中心からではなく、人間と環境の双方向性と共生へと方向づけられている。神の宣教への転換から改めて問われる人間の責任について、本文書の結論の中でも次のように確認されている。「神の霊による宣教は被造世界全体を刷新する。『地とそこに満ちるものは主のもの』(詩24・1、NIV<sup>36</sup>)である。いのちの神は、自然を守り、愛し、また配慮する。人類は地球の主人ではなく、被造世界の保全のために配慮する責任を持つ存在である」(105項)<sup>37</sup>。その責任は、「絶え間ない自然破壊をもたらす過度な強欲と、際限なき消費行動は止められなければならない」(105項)という環境に関する悔い改めと経済的正義を求める勧告としても述

べられている。これは、1章において、環境に関する正義に続いて、経済に関する正義の問題が取り上げられていることに対応している<sup>38</sup>。

## 2.2.2 経済に関する正義

1章において経済に関する正義について述べられているのは、「変革のスピリチュアリティ」というタイトルがつけられた第29項から第35項においてである。冒頭の第29項で「キリスト教の証は [中略]、どう宣教を生きているか、という点において現される」ことを確認した後、第30項で「宣教のスピリチュアリティは、常に変革的である。それは、経済や政治においてであれ、教会においてであれ、いのちを破壊するすべての諸価値や諸体制に抵抗し、それらの変容を求める」ものであることが確認されている<sup>39</sup>。これらの確認の後、同じ第30項の中で、2005年にWCCから出された「オルタナティブなグローバル化」についての文書が引用され、経済に関する正義が信仰の課題であることが主張されている。「私たちの神への忠実、そして、神が無条件に与えてくださるいのちの恵みは、今日の経済的秩序における偶像崇拜的な前提、不公正な体制、抑圧的・搾取的な政治と対決することへと私たちを突き動かす。経済とその正義は、常に、被造物世界に対する神の意志の中心に位置する信仰の課題である」(30項)<sup>40</sup>。続く第31項では、神とマモンの対立(マタ6・24)を参照しながら、「グローバルな自由市場の支配を通じた無制限の成長を目指す政策は、貧しい者や自然界の果てしない犠牲を必要」(31項)としていること、そして、それは神の国への招きと相容れないものであると述べられている<sup>41</sup>。

さらに、経済の問題は権力構造の問題と結びついた問題であることを、『いのちに向かって共に』は見抜いており、「権力の乱用や誤った力の行使に対する悔い改め」及び「権力体制の批判的検証、そして権力構造の適切な行使」を求めている(33項)<sup>42</sup>。したがって、「人を搾取し奴隷化する悪を見抜き、暴くこと」(43項)、そして、「神がすべての存在に対して願っておられるいのちの充溢を妨げる諸力と闘い、これらに抵抗することと同時に、正義、尊厳、そしていのちのために捧げられている運動や先駆的取り組みに携わる人々と共働すること」(45項)が、イエスの道に従うこと、つまり、「神の宣教」へ参与することに伴われると述べられている。

## 2.3 癒しの全体性の回復

これまで、どちらかと言えばグローバルな視野で述べられてきた正義の問題が、

続く2章の後半では、教会共同体にとっての具体的な課題として提示され、変革が求められている。まず、共同体に公正な関係を求める「正義と包摂的であることをめざす宣教」(46項から49項)について述べられ、その後、「癒しと全体性の回復としての宣教」(50項から54項)に関連して、グローバルな諸問題とローカルな地域コミュニティにおける一人ひとりの尊厳の回復と癒しが包括的に捉えられている。

### 2.3.1 正義と包摂的あることをめざす宣教

まず、教会は、差別のない公正な構造と関係性をもつ共同体であることが望まれている。「御国のよき知らせとは、公正で包摂的 [just and inclusive/gerechte und inklusive] な世界の実現の約束をめぐるものである。包摂的であることが、人類と被造物で形成される共同体の内に、人と被造物が互いに受け止め合うと共に一人ひとりが互いの神聖な価値を尊重し守り合う、公正な関係を育む」(46項)。それゆえ、教会では、「共同体の破壊につながる価値観や実践を拒否すること」(49項)が求められ、「キリスト者は、あらゆる形の差別の罪深い本質を認識し、不公正な構造を変革するよう召されている」(49項)ことが確認されている。

ここでは、まず人類と被造物全体を射程に入れ、そこに「包摂的」であること、すなわち、人間と環境、そして人間同士の尊厳の相互承認と共生が求められている。教会は、そこに参与する一つの共同体であり、そのアイデンティティに関わる「洗礼」は、神に与えられたいのちを共に生きる包摂的な世界の希望を示すものとして理解されている。つまり、教会共同体への帰属を表す「洗礼」は、「神の宣教」に参与する共同体への帰属であるがゆえに、神の前にあらゆる障壁を乗り越えて、共に神聖な価値を承認し合う関係を生きること、いつもそのような価値に基づいて他者へと開放された包摂的なコミュニティの一員となることとし、また促しとなる。神との垂直の関係を軸として自覚的に集う教会共同体への帰属感情と連帯感は、同時に地域における神のいのちへの帰属感情と連帯感の源泉となる。したがって、このような包摂的な教会共同体の形成は包摂的な地域コミュニティ形成へと向かう開放的で動的なものであると言えよう。このような包摂性への求めは、続く項目において、そこに包摂されるひとりの人間の癒しを包括的、全体的に捉えることへと展開されている。

### 2.3.2 癒しと全体性の回復としての宣教

第50項から第54項の「癒しと全体性の回復としての宣教<sup>43)</sup>」では、「個人および共同体の癒しや全体性の癒しや回復のために行動することは、宣教の重要な側面である」(50項)<sup>44)</sup>ことが主題とされている。そして、癒しが、イエスの活動及びその弟子たちの召命の中心的様相であったことが確認された後、その実践は、「祈ること、牧会的または専門的ケア」だけでなく、「困窮の根源を預言者的に批判すること、不公正を許容する社会構造を変革すること、科学的研究をすることもその活動の重要な側面である」(50項)と述べられている<sup>45)</sup>。ここにも、上に見た「正義の回復」という観点や「周縁からの宣教」という視座が継承されていることを読み取ることができるであろう。それは次の項でも同様である。

すなわち、聖書的・神学的伝統と符合することとして、「人間を多面的な統一体」と見なすがゆえに、「人間の全体性の回復を考える時には、社会的、政治的、生態学的な側面を無視することはできないのである」(51項)<sup>46)</sup>。人間の健康が全体性の回復として述べられるとき、それは、神と人間と被造世界の共生に関わる包括的な視野で行われている。したがって、このような包括性と人間の全体性の文脈に位置づけられた個の尊厳の回復は、個人主義とは相容れない。むしろ、「個人主義、不正義はこの共同体の形成を阻むもの」であると述べられている<sup>47)</sup>。したがって、第52項において、「周縁化された人々」とイエスへの注目から、一人ひとりの「全体性の回復」としての健康もしくは病気の問題が教会共同体や地域のコミュニティの課題として具体的に取り上げられることになるのである。

まず、「周縁化された人々」の視座から「障がいや病気」の片面的な理解への修正が求められる。「障がいや病気は、多くの人々によって罪の現れとして見られたり、治療されるべき医学的問題として見られたりしてきた。医学的な思考様式は、個人の内にある『欠陥』と思われるものを修正したり治療したりしなければならないことを強調する。しかし、周縁化された多くの人々は、自分たちのことを『欠陥』や『病気』のある者とは見なしていない」(52項)<sup>48)</sup>。そして、次に、イエスの癒しの特質がコミュニティの観点から示されている。「しかし同時に忘れてはならないのは、イエスがその人々を共同体の構成員としてふさわしい地位に復帰させたという点である。癒しとは、何か欠如していると思われるものを直すことよりもむしろ、全体性を回復することなのである。全体性を取り戻すためには、各部分の間の悪くなっている関係を修繕する必要がある。[中略]」宣教は、障がいのある人や病気のある人の教会と社会の営みに対する十分な参加を促進すべきなので

ある」(52項)<sup>49</sup>。教会の共同性と地域のコミュニティの両次元が言及されている。

続く第53項では、教会が地域にある共同体として、すでに包括的な意味における癒しに貢献してきた、また、これからできる具体的な営みが記されている。「教会がカウンセリングやグループケアその他の健康増進のプログラムを行うクリニックや医療機関を設置したり支援したりすることもできる。また、各地の教会では、グループを作って病床にある会員を訪問することも可能であろう。病気の人と共に祈ること、またその人のために祈ること、罪の告白とゆるしの宣告、按手、塗油を行うこと、その他さまざまな聖霊の賜物（Iコリ12章）を用いることも癒しの過程の一部である」(53項)<sup>50</sup>。教会共同体の変革は、何か新しい行為を求めているというよりも、むしろ、ここに示されているような教会の豊かな資源が、「公正で包摂的」である共同体を目指す視点から、そして、全体性の回復という視点から捉え直され、積極的に用いられていくことを求めていると言えよう。また、教会が人間を全体的に捉え、それが回復される公正で包摂的な共同体の形成を実現していくときに、地域のコミュニティ形成に関わらざるを得なくなり、そこに協働という課題が現れることになるであろう。その課題は、3章と4章の主題の下で継続されていく。

### 3. 希望の共同体としての教会

すでに、1章と2章で扱われてきた神によって祝福された世界における正義と癒しの全体性の回復の文脈でも、教会共同体の「神の宣教」への参与のあり方について述べられてきた。しかし、3章「共同体の霊 — 躍動する教会」(55-79項)では、主題に教会という「共同体（community/Gemeinschaft）」が掲げられ、「神の宣教」というその起源から教会の共同体としての特質が改めて捉え直されている。以下に、3章における「交わり」、「多様性と協働」、「文化的・人種的境界線を越える」、そして「奉仕」の四つの観点に、4章からの「他の宗教的伝統との協働」という観点を加え、本文書に見られる教会という共同体の特質とあり方についての考えをまとめることを試みる。

#### 3.1 交わり

冒頭の第55項で、「教会のいのちは、三位一体の神の愛に起源を持っている」こと、そして、このこの愛を分かち合う「交わり（コイノニア）」に教会の特質があることが確認されている。さらに、この交わりに生きることが、「すべての人々

へのよき知らせになるよう召されている」という仕方、教会と世界とを関係づけている<sup>51</sup>。第56項で「いついかなる場所においても」<sup>52</sup>と強調されているように、神の愛は「全人類に対する〔中略〕霊的な賜物」<sup>53</sup>であり、教会は、歴史的にも神学的にも「宣教のために生まれた共同体」(57項)<sup>54</sup>であり、「神の宣教的な意志を遂行すること」をその目的としていることが確認されている。教会は自己を中心に考えるならば、教会の内と外を分けることができるが、「神の宣教」の理解のもとで神中心に考えるならば、「教会の内と外」という尺度それ自体が相対化される。しかし、それによって、教会という歴史的な大きさをもった共同体の特質が薄れてしまうのではなく、むしろ、神の愛を分かち合う「交わり」としての教会が全被造物に与えられている神の愛の証となるとときに、教会に相応しい共同体形成をしていることになるということである。

### 3.2 多様性と協働

したがって、この世にある教会は、仲たがいや分裂をするのではなく、むしろ、「キリスト教共同体は、多様性を重んじつつ、パートナーシップと協力の精神に基づいて共同の証しの手段を見いだし実践するよう召されている」(63項)と言われているのである<sup>55</sup>。キリスト教内で、多様性を認め合い、一致していくエキュメニカル運動は、そのような証の手段と言える。

### 3.3 文化的・人種的境界線を越える

さらに、各個教会 (local congregations/Ortsgemeinde) においても、多様な人々を包摂する交わりの実現が求められている。それは「境界線を越える」という言葉で述べられている。「各個教会は居心地の良い環境から一歩踏み出し、神の宣教のために境界線を越えてゆくよう押し出される」(74項)<sup>56</sup>。それは、教会が「文化的・人種的境界線」を越えて、「様々な文化をもつ人々が集う場」となり、「地域性を反映する多文化的宣教」が実現することを指している(75項)<sup>57</sup>。この課題は、後の4章で、過去の植民地主義的宣教における「画一性の押し付け」<sup>58</sup>に対する批判として反省されている問題、あるいは、先行する2章の後半に見た、差別のない包摂的な共同体形成とも癒しと全体性の回復の問題にも通じている。その際、「地域性の反映」への求めは、教会共同体が地域のコミュニティに開かれているだけでなく、教会共同体の中で地域における多文化的共生が実現していく仕方での

参与が求められているということである。

### 3.4 奉仕

したがって、いま確認された境界線を越えていく方向性は、教会共同体が具体的に存在する地域の現実の状況の中で奉仕するという課題につながっていく。第78項で次のように言われている。「教会はそれぞれの地理的・政治的・社会的・経済的状況の中で、神の民としての信仰と希望を具体的に奉仕（ディアコニア）によって、イエス・キリストにおいて神が何を為しておられるかを証しするように召されている。[中略] 教会は奉仕を通して奉仕者である主の歩みに従い、神の宣教に参与するのである」<sup>59</sup>。その時にも、「周縁から」という視座、そして、正義と癒しの全体性の回復を教会共同体の中で、そして同時に地域のコミュニティの中で実現していくという目標が前提にされていることは言うまでもない。

### 3.5 他の宗教的伝統との協働

すでに2章において、神のいのちの充溢を妨げる諸力への抵抗と同時に、神のいのちを守ろうとする諸運動との「協働」について語られていることについては指摘した（45項）。それに対して、「伝道」を主題とした4章の「ペンテコステの霊 — 天地万物のための福音」（80-100項）では、他宗教との「協働」について語られている。多元化した世界で多様な信仰に出会う時、「真の宣教は、『他者』を宣教の『対象』とするのではなく、宣教におけるパートナーとするのである」（93項）と述べられている<sup>60</sup>。その際、さらに対話と学びによって教会という共同体自身が豊かにされるという協働が考えられている。「伝道 [evangelism/Evangelisation] は、私たちの最も深い確信を宣言することだけではなく、他者に傾聴すること、他者によって問われ、豊かにされることさえ伴うのである（使10章）」（95項）<sup>61</sup>。このように、伝道する教会というアイデンティティもまた、宣教論的パラダイム転換を通して、他者との対話と協働に開かれて理解されるものとなっていることが分かる。なぜなら、「いのちを肯定するあらゆる文化において、神の霊を見出すことができる」（93項）からである<sup>62</sup>。「神の宣教」への参与において、教会という共同体内部の協働はもちろんのこと、しかし、それだけでなく、外部の共同体との協働が不可欠であることは、以上に確認してきた「神の宣教」理解に基づけば必然的なことと言えよう。そのことは、本文書の結論である「いのちの祝宴」の中でより力強く述べられている。



#### 4. 「いのちに向かって共に」

最後に、結論（101-112項）における教会という共同体がどのように語られているかを確認する。冒頭の第101項で、まず神がその宣教において、「あらゆる人と被造物世界、特にいのちの充溢を切望する抑圧された人々と艱難の中にある人々」を「神の国での食事」（ルカ14・15）へ招いておられることを示すことからはじめられている<sup>63</sup>。そして、その関連において、教会の存在意義は、被造物世界全体の解放と和解の一つのしるしとしてすべての人に開かれたいのちの祝宴であることに見出されている。「教会の任務は、祝宴を準備して、すべての人をこのいのちの宴に招くことである。その宴は、豊かないのちの源である神の愛から溢れ出る、創造と実りの祝祭である。それは宣教がめざす、被造物世界全体の解放と和解の一つのしるしなのである」（101項）<sup>64</sup>。そして、第110項は、「一つひとつの人類の文化は尊ばれるべきであり、福音は、特定の集団の中でのみ保持されることなくすべての人に開かれているのである」と述べた上で、「聖霊に伴われて私たちがこのことをなすならば、いのちに向かって共に働くために、文化的・宗教的障壁を越えることができる」<sup>65</sup>と述べている。その上で、第111項において、「教会の諸組織と宣教団体は、いのちのために共に活動すべきなのである」という呼びかけが行われている<sup>66</sup>。そして、最終項である第112項は、終末論的な神への希望といのちの祝宴への招きを確認した後、「私たちは、『いのちの神よ、正義と平和へとわれらを導きたまえ！』と祈りつつ」、神の宣教に「謙虚さと希望をもって共に献身してゆくのである」という祈りと宣言によって結ばれている<sup>67</sup>。

#### 5. まとめの考察

以上、キリスト教のエキュメニカル文書『いのちに向かって共に』が提示する21世紀の教会のヴィジョンについて、特に教会共同体に関わる視座や主題を中心に概観してきた。20世紀に起こった宣教論のパラダイム転換によって提唱された「神の宣教」理解を基盤として、従来の教会中心主義的な「周縁への宣教」から「周縁からの宣教」という方向性への転換が明確に示されていた。「周縁にいる」とは、正義と尊厳から排除されていることであり、そこへの連帯において、神から与えられているいのちの尊厳が際立つことが認識されている。『いのちに向かって共に』では、「神の宣教」という枠組みをなす条件のもとで、共同体としての教会の特質と、各地域のコミュニティ形成のための協働のあり方が確認されている。教会は、「神の宣教」がそれを目指すものであるがゆえに、共同体として包摂的であり、正

義と癒しの全体性の回復を求め、そのような仕方ですべての「神の宣教」に参与し、この世における「希望の共同体」となっていくことが求められている。

本文書には、ゼレがキリスト教の教会の三つの主要な課題とした「宣教（ケリユグマ）」、「奉仕（ディアコニア）」、そして「交わり（コイノニア）」のすべての要素が含まれている<sup>68</sup>。『いのちに向かって共に』では、その際、「神の宣教」理解を軸として「交わり」と「奉仕」が位置づけられている。「奉仕」は、「周縁から」明らかになる課題とのつながりの中で理解されるものとなっている。また、「交わり」としての教会と並んで、あるいはこの伝統的な主題を「神の宣教」という枠組みにおいて明確にするために、共同体としての各教会が、「多様性（diversity/Vielfalt）」、「パートナーシップ（partnership/Partnerschaft）」、「協働（cooperation/Zusammenarbeit）」、さらには、「文化的・人種的境界線を越える」ことへと開かれた交わり（共同体）となることが提言されている。加えて、「宗教間の対話と協働」にも開かれることで、改宗主義的・教勢拡大主義的宣教ではなく、その連帯と協働において、「神の宣教」が目指す「被造世界全体の解放と和解の一つのしるし」（101項）<sup>69</sup>となることが求められている。さらに、「神の宣教」の神学に枠づけられて、正義の問題においても、包摂的な共同体の問題においても、人間中心主義から人間と自然環境との共生への転換が視野に入れられている。したがって、教会という共同体の「交わり」と「奉仕」という主題において、すべての人のいのちとその尊厳を守ることだけでなく、むしろ、人間の癒しの全体性の回復において不可欠な要素として、環境と人間との共生が常に課題となるということも本文書が示している一つの重要な点である。

## V. おわりに

本稿の冒頭で、富坂キリスト教センターで「環境・共生・協働のコミュニティー教会の将来—」という新しい研究会が立ち上がったことについて報告した。そして、本研究会が、21世紀の最初の四半世紀の世界的状況を見据えつつ、人間が共に生きることを支えるコミュニティーを主題とし、すべての人が人間らしく、そして共に生きることを支えるコミュニティーとはどのようなものであるか、環境、地域、協働の視点から考察し、共同体としての教会の将来的ヴィジョンを探る学際的な共同研究であることを述べた。そして、本稿は、本研究会の主題と視点が、今日のエキュメニカル運動が展望する21世紀の世界におけるキリスト教の宣教論の視座や課題と共鳴しているということを示すことを試みた。そこから教会の課

題が、被造世界全体の解放と和解における共生という包括的なコミュニティの課題とつながっていることも確認された。

したがって、本研究会は、上に述べた意味におけるキリスト教的な関心を共有しつつ、キリスト教の信仰や知識を前提としない研究員にも開かれており、研究員の関わる領域は、環境哲学、社会福祉学、神学、心理学、仏教思想、倫理学、農業論、人権論、スローフード論等の多岐に亘っている。また、実践的にも、牧会、座禅会、環境保全に向けた合意形成、社会福祉事業、学校教育、こども食堂、スピリチュアルケア、スローフード運動等、様々な教会組織や地域組織に関わり、それぞれの仕方でも地域の包括的なコミュニティ形成に関わりをもつメンバーで構成されている。本研究会自体が、境界線を越えて「他者に傾聴すること、他者によって問われ、豊かにされること」(95項)<sup>70</sup>を目指す一つの新しい学びの共同体である。それぞれの現場とそのリフレクションから提示される問いや課題を共有しながら、いのちに向かって共に生きるコミュニティと教会の将来について希望をもって探求する3年間の旅がはじまる。

〈註〉

- 1 ラテン語については水谷智洋編『羅和辞典（改訂版）』研究社、2020年を、語源についてはグリニス・チャントレル編『オックスフォード英単語由来大辞典』終風舎、2015年を参照した。
- 2 パウロは、聖餐に与る「交わり」あるいは「参与」を言い表す場合にも「コイノニア」という語を用いている（1コリ10:16）。
- 3 ドロテー・ゼレ著、三鼓秋子訳『神を考える—現代神学入門』新教出版社、1996年、216頁参照。
- 4 ただし、ゼレは、従来の教会が宣教から奉仕と交わりを切り離してきてしまったことに警笛をならしている。同上、220-221頁参照。
- 5 英語については、小稲義男ほか編『新英和中辞典』研究社、1989年及び松田徳一郎監修『リードグズ英和辞典』研究社、1984年を参照した。
- 6 ドイツ語については、国松孝二編『独和大辞典（第2版）』小学館、2000年を参照した。
- 7 これは、「コミュニティを社会システムの一局面」と考える20世紀のコミュニティ研究のパラダイム転換に従っている。パーソンズによれば、コミュニティは社会の統合を担う社会システムのサブシステムに位置づけられている。そこに、宗教、家族、地域組織等が数え上げられているという。コミュニティ概念の変遷については、「地域デザインフォーラム 板橋区と大東文化大学の共同研究中間報告書」[https://www.daito.ac.jp/research/region/activity/designforum/publication/report01/file/file\\_chapter01\\_1.pdf](https://www.daito.ac.jp/research/region/activity/designforum/publication/report01/file/file_chapter01_1.pdf) (2022/12/03 アクセス) を参照。
- 8 リヒャルト・フォン・ヴァイツゼッカー『新版 荒れ野の40年 ヴァイツゼッカー大統領ドイツ終戦40周年記念演説』岩波書店、2009年、11頁。
- 9 世界教会協議会：世界宣教伝道委員会・信仰職制委員会編『いのちに向かって共に／教会：現代世界エキュメニカル運動における二大重要文書』キリスト新聞社、2017年（以下、『いのちに向かって共に／教会』と略記）に収録されている。

- <sup>10</sup> <https://www.oikoumene.org/about-the-wcc> (2022/11/11 アクセス)。
- <sup>11</sup> WCCに加盟する日本キリスト教協議会(NCCと略記)もまた、同様のシンボルをロゴマークとしている。
- <sup>12</sup> 『いのちに向かって共に／教会』、200-201頁参照。
- <sup>13</sup> 同上、201頁。松田和憲『現代日本の「宣教の神学」研究 - パラダイム転換を目指して -』関東学院大学出版社、2010年、370頁。
- <sup>14</sup> デイヴィッド・ボッシュ『宣教のパラダイム転換(下巻)啓蒙主義から21世紀に向けて』新教出版社、<sup>3</sup>2007年(邦訳初版2001年、原著初版1991年)(以下、ボッシュと略記)、234-235頁参照。
- <sup>15</sup> 『いのちに向かって共に／教会』、201頁。
- <sup>16</sup> ボッシュ、236頁。Thomas Kramm *Analyse und Bewährung theologischer Modelle zur Begründung der Mission*, Aachen, 1979, 210頁が参照されている。
- <sup>17</sup> 同上、238頁。
- <sup>18</sup> 同上。
- <sup>19</sup> 『いのちに向かって共に／教会』、203頁。
- <sup>20</sup> 同上、203頁。
- <sup>21</sup> 同上、12頁。
- <sup>22</sup> 同上。
- <sup>23</sup> 同上、13頁。
- <sup>24</sup> 英語版(Together towards Life: Mission and Evangelism in Changing Landscapes) は、[https://www.oikoumene.org/sites/default/files/Document/Together\\_towards\\_Life.pdf](https://www.oikoumene.org/sites/default/files/Document/Together_towards_Life.pdf)、ドイツ語版(Gemeinsam für das Leben: Mission und Evangelisation in sich Wandelnden Kontexten) は、[https://www.oikoumene.org/sites/default/files/Document/TogetherTowardsLife\\_de.pdf](https://www.oikoumene.org/sites/default/files/Document/TogetherTowardsLife_de.pdf) (2022/11/28 アクセス) を参照。
- <sup>25</sup> 『いのちに向かって共に／教会』、13頁。
- <sup>26</sup> 同上、15頁参照。
- <sup>27</sup> 同上、205-206頁の解説参照。
- <sup>28</sup> 同上、30頁。
- <sup>29</sup> 同上、32頁。
- <sup>30</sup> 同上、33頁。
- <sup>31</sup> 同上。
- <sup>32</sup> 同上。
- <sup>33</sup> 同上、40頁。
- <sup>34</sup> 同上、22頁。
- <sup>35</sup> 同上、23頁。
- <sup>36</sup> New International Versionの略記。
- <sup>37</sup> 『いのちに向かって共に／教会』、66頁。
- <sup>38</sup> 同上、66-67頁
- <sup>39</sup> 同上、27頁。
- <sup>40</sup> 同上、27-28頁。注4に書かれた引用元については、同上、73頁を参照。
- <sup>41</sup> 同上、28頁。

- 42 同上、29 頁。
- 43 同上、37-40 頁。英語では、“Mission as Healing and Wholeness”、ドイツ語では、“Mission als Heilung und Suche nach Ganzheit” と記述されている。
- 44 同上、37 頁。
- 45 同上。
- 46 同上、38 頁。
- 47 同上、38 頁。
- 48 同上、38-39 頁。
- 49 同上、39 頁。
- 50 同上、39-40 頁。
- 51 同上、41 頁参照。
- 52 同上、41 頁。これは1982年の『リマ文書』からの引用である。
- 53 同上。
- 54 同上。
- 55 同上、44 頁。
- 56 同上、50 頁。
- 57 同上、50-51 頁。
- 58 同上、63 頁。
- 59 同上、52 頁。
- 60 同上、61 頁。
- 61 同上、61-62 頁。
- 62 同上、60 頁。
- 63 同上、64 頁。
- 64 同上、64-65 頁。
- 65 同上、69-70 頁。
- 66 同上、70 頁。
- 67 同上、70-71 頁。
- 68 ドロテー・ゼレ、前掲書、216 頁参照。
- 69 『いのちに向かって共に／教会』、65 頁。
- 70 同上、61-62 頁。